

# 特集：最近開発された家畜の細菌性呼吸器病および 消化器病用抗菌性物質の基礎面と応用面\*

## A Symposium : New Antimicrobial Agents Applied for Bacterial Infection of Respiratory and Digestive Organs in Domestic Animals

はじめに

高橋 勇 (日本獣医畜産大学)

近年、畜産経営が大規模化するに伴って、各種の伝染病が多発し、その被害が増大している。ところが、細菌性伝染病の多くは、ワクチンがなく、またワクチンがあるものでも、必ずしも確実な効果をあげえないときや対策に急を要する場合もあるなどの諸点から、それらの防除のために、各種の抗菌性物質が広く応用されており、かなりの効果をあげていることは周知の事実である。

また、一方では家畜への抗菌剤の広範な応用に伴って薬剤耐性菌の増加や畜産物への薬剤残留が問題となってきた。

以上のような背景のもとで、ここ4、5年の間に新しい抗菌性物質が次々と開発され、漸次野外に応用されつつある。

そこで本会では、会の目的にもかかっている「抗菌性物質の家畜への応用上の問題点の検討、技術・知識の普及を行い、……薬剤使用の適正化をはかる」という観点から、今回は最近開発された抗菌性物質に関するシンポジウムを開催することとした。

本会がこれまで11回にわたり実施してきたシンポジウムでは、このような課題はまだとりあげたことがなかったので、今回の企画にあたり、まず最初に対象とする抗菌性物質を、何年以降に承認されたものとするかを検討した。その結果、承認後5年以上経過したものについては、すでに報告や解説が多く公表されており、これらに対する認識がかなり普及しているものと考えられるので除外し、昭和56年以降に承認されたものに絞った。さらに、シンポジウムの開催時間の制約もあるので、現在、野外で最も多発している呼吸器病および消化器病への応用を目的として開発された6種の抗菌性物質を対象を限定することとなった。

したがって、今回は次のものは対象外となったので、ご諒承いただきたい。すなわち、目下開発中のものや申請中のもの(昭和60年1月現在)、昭和55年以前にすでに成分(薬剤の原体)として承認をうけており、その後新たに用途開発等が行われたもの、局所投与剤(乳房内や子宮・膈内の投与剤)、小動物専用薬剤ならびに抗原虫剤として承認されたものは除いた。

次に、各演者の講演にさいしては、あくまでも学問的立場にたつて、当該薬品について基礎的な面と臨床的な面を客観的に紹介を願うこととした。このため、標題および講演中ならびに要旨中で用いる薬剤名は製剤名ではなく、一般名で発表するようお願いした。ただし、今後聴

---

\*昭和60年4月8日に開催された、本会主催の第12回シンポジウムの要旨

## 2 家畜抗菌会報 (1986)

取者あるいは要旨の読者が、このシンポジウムで示された成績を参考として、当該薬剤を実際応用に移す場合の便宜を計るために、各要旨の本文の最後に承認事項（製剤名、用法、用量、効能その他）に関する項を設けることとした。

なお、本会としては、今後機会をみて、同様の企画を実施したいと考えている。

（編集者注：以下の各要旨の本文中あるいは図表中における *Salmonella* の菌名に関しては、既発表の文献から引用したもの、あるいは著者以外の研究者の成績を引用したものが大部分であるため、Le Minorの提案した記載法（1983）にはよらず、原文の記載名をそのまま掲載した）